

津の国人

室生犀星

青空文庫

あらたまの年の
三年を待ちわび
て

ただ今
宵こそにひまく
らすれ

津うづらの国うづら兔原の山下に小さい家を作つて住んでいた彼に、やつと
宮みやづか仕えする便りが訪ずれた。僅わずかの給与ではあつたが、畑づく
りでやつとその日を過している男には、それが終生ののぞみであ

ただけに、すぐにも都にのぼりたかつた。けれども衣服万端の調度にごと欠いている彼に、どうして道中のいりようを作つていかさえ、見当の立たないものがあつた。自家の畑物をみんな食べてしまつてゐる哀れな夫婦に、手の尽つくしようのない貧乏が永い間まくい込んでいた。

月のいい夜であつた。一束の白い菜をかかえた夫は、簀すの子のうえに白い菜を置いたが、筒井つづいはそれがどうして手にはいつたかを尋たずねるには、あまりに解り切つたことだつた。

「固く塩せよ。」

夫の顔は気色ばんで、少し昂奮しているようだつた。

筒井は蓐しとみをしめに立ち、男は誰かに弁解するようになつた。

「あまり月がいいものだからつい、……」

「もつとご尤もにございます。」

「白い莖が一面にならんでいてそこに射さす月の光じゃ、我を忘れて白い菜に手がふれた。」

「畑物に月がさしたらそれはみな仏の座のように申します。それに、間もなく宮仕えに発たたれるあなたさまに、誰が何を申しましようぞ。」

「では固く塩して？」

「はい。」

妻の筒井が白い菜をかかえて去ったあと、彼は手にふれた白い菜の冷たいゆたかさをたなごころに再び感じた。誰があんな美し

さを辞退することが出来よう、花もそうであるし、こがねいろを
している橘たちばなの実もそうであつた。きしむような白い菜の幅の広い
莖は妻のただむきのように美しかった。決して辞退できるもので
はない、彼は薮しとみの破れから、もうもうとこめる秋夜の月を眺めや
つた。

宮仕えすればいまより収入があり毎月妻の筒井に送り、筒井は
その黄金で衣裳をととのえ、一年も経たてば夫は都から迎えに来る
はずだつた。四し条五ご条の秋色はどんなに華やかなものかも知れ
ない、築地つじの堀へいをめぐらし、中の島をしつらえた広大な庭に、彼
は好む樹木を配して子供の時から庭が作つて見たかつた。桂うちぎを
着けた妻は、几帳きちょうの陰で長い黒髪を解いて匂におわすであらうし、

筒井にそういう高い生活をあたえれば直ぐにも美しくなる、彼のそんな考えは妻を可憐とも美しいとも、いいようのないものに思わせた。筒井の持つ宝物のようなからだは、誰にくらべても、見劣りのするものではなかった。それに天稟てんぴんともいうべき筒井の言葉づかいの高雅なことは、高い官についた人の次女であることをおもわせ、卑賤ひせんのそだちである彼に勿体もったいないくらいのものであった。いままでも、白い菜のほか、彼は畑物を掠かすめなければ、たつきに趁おわれがちだった。或る夏の夕方には、布片きれ一枚を畑物を掠つぐめた償ないに畝うねの上に置いてもどつたこともあれば、若干の金をも眼に立つところに置いてただで掠ぬめる野のものでない証左としていた。しかし窮乏はもう布片ぬのも、若干の金をも畝の上に置か

せなかつた。

筒井は或る官人かんにんのもとに働くように手立てをしたが、低い官人ゆえ、ただそこで衣食するだけであつた。いま彼の心をいら立たせるものは妻の衣食するところを見付けること、そこで少時待つてもらふことだつた。筒井もそれは承知のうえだつた。話は筒井はいつからでも低い土地がかりの官人に仕えることに決り、もう彼の心労はなかつた。筒井は賑にぎやかな笑いをたたえ、せめても、それが面白いことであるようにいつた。

「おなじ時刻にそれぞれに立ちとうございます。あなたさまは都へ、わたくしは官人のもとにこの家と一緒に立ちたい考えにございます。」

それはなにかきがか気懸りな話ではあつたが、そういう申出もうしいでは愛情のおもい遣やりが香こうのように匂におうてくるようでもあつた。筒井はいつでも、そんなふうに申し出ることですぐれているものを持つていた。

「一人がこの家こゝにのこることは心辛つらいものがある。それはいい考えだ。」

「そして渡わた舟しぶねまでご一緒にまいりましょう。」

津の川の渡舟は東と西にわかれていて、東にのぼれば都への渡舟だつた。流れを下れば土地がかりの官人の村に着くよう、渡舟はしかも同じ時刻ときに出るはずであつた。

彼はなにかなしその企くわだての思いつきに笑つた。一いちまつ抹まつのにぎやか

さがどういふ困苦のなかにいても、いつも笑いを見せる筒井らしい終つひの美をとどめるに似ていた。しかも、そんな筒井の考えにはこの家を売るのに都合のよい立退たちのかきの仕儀にもなり、道中衣裳の費用にも役立つのであった。彼はそこまで考えることが出来ず、うまく暗示した筒井のいかにも自然らしく、品の高い、言葉の意味がやつと分るほどだった。

津の国に来たときも渡舟であつた。まだ子供だった彼は渡舟のへりにいて青ぐろい水の底を見て怖こわがった。しかも筒井を迎えに行つた春の渡舟に、つやのいい御車みくるまの牛うしが一頭乗せられ、ゆつくりと船頭は櫓ろをこぎながら、皆さん大声を出さないでくれ、牛が喫驚びっくりすると川にはまるから頼みますぞと呶鳴どなつた。しかも、

筒井と彼の乗っている舟とすれすれにこいで行つた。筒井は彼に身をすりよせ、しきりに気を揉もんでいった。

「牛が川におちたらどういたしましょう。」

「そんなことは万々ござるまい。」

町家の女のつれている子供が突然怖こわがつて大声に泣き出した。

船頭ははらはらして叱しっしっ々と注意をし、母親は子供の口を手でふ

さいで、泣くと牛がびつくりして川に落ちるぞというと、子供が一層大声になり、怖がつて泣き出した。その時、筒井の手がしずかに伸べられ、子供の怖がる眼路めじをふさいだ。伏見ふしみあたりでできる、衣裳の美しい小さい人形であつた。

「これ、たまうぞ。」

子供は泣き歇やみ、舟中ではことに美しく榮はえる人形を抱きよせた。この女らしい優しい思いつきは舟中の客の胸に、いしくも温かい思おもいをかもさせ、牛を乗せた船頭は感動していった。

「助かりましたぞ御おむすめごさま娘子つむり様。」

筒井は謙遜けんそんらしく頭つむりをさげて見せた。彼はこの妻の仕儀にほとと感銘したが、舟中のこと故、それはよい思いつきだといったきりであった。

牛を乗せた舟は川を中心に出てゆき、船頭は櫓をあげて筒井にもう一度、お礼のような形を取って見せた。舟中の牛の背中にある白い斑ぶち点がやつと見えるくらい遠のいた時分に、男は乗客に聞えぬ低い声でささやいた。

「よく致されて我ら面目を施した。」

匂におやかな新妻はやつと笑つて見せただけであつた。

「人形はよい人形ではなかつたか。」

「母のかたみにございます。」

十七で母にわかれた筒井は、その年から三年経つたあと、父に死別していた。

「そんな貴い人形を惜しいことを致された。」

「いいえ、牛が哀れにございます。それにあの子供もみめ美しく覚えましたから惜しいことはありません。」

渡舟が土手に着くと筒井は津の国の土をはじめて踏み、柔らかい春早い草々の頭にはもはや先の美しい緑がもえていることを知

った。そして、それは何と夥おびただしい蘆あしの繁しげりであつたらう、それらの蘆にはもう青い液状の緑がのぼりかけていた。

例の牛は土手にあがると、のそりのそりと曳ひきこ子と一緒に歩いて行つた。白の斑ぶち点はまるで雲のように鮮やかだった。

「津の国はよいところでございますね、水が多いので景色が美しくおぼえます。」

かくて彼らは五年の月日をこの津の国に送り、男は下の役を解かれてからきようですでに三年経つていた。

その渡舟でおなじ時刻に別れるのも、なにか宿縁のようなものがあつた。彼らはもう売る物も、人に頒わけるものもないほど、す

べてが衣食についやされたあとだったので、家を立ち退くには雑^ぞ作^{うさ}はなかつた。筒井は青い下帯を彼にいつも永くしめてくれるようにいい、見れば筒井がはじめての夜にといた匂^{にお}やかな青い下帯だった。永い五年のあいだについぞ見かけたこともなく、大切にしまつて置いたものらしかった。彼は秘蔵の品に手をふれるように青い下帯を撫^なでさすりながら、珍らしい物をいままで蔵^{しま}つて置いたものだといった。

「何となく蔵つておいたのでございます。お別れのかたみになるなぞとは、つゆ覚えませぬのに。」

「我ら何も遣^{つか}わすものもない。」

彼は立つてみ仏のおわす扉をひらいて、小さい唐^{からわた}渡りの釈^{しゃか}

迦^{ぶつ}仏を一体取り出した。それは耳の中にでも、しまい込まれるほどの小さい御姿をうつしたものだ。黄金^{こがね}でつくられた、彼の一つの高貴な宝物にぞくすべきものであった。

「父からのかたみでこれだけは残しておいたもの、再^また会う日に返してくればいい、我らのかたみにしまつておいてくれ。」

「これはあまりにわたくしごときものには勿^{もつたい}体のうございます。」

「いや、我らが持つていてはどうなるみ仏の行末であるか分らぬ、そなたならそんな不^{ふつつか}束はあるまい。」

「ではおあずかり申します。これは何とお美しいお顔にございませう。」

燦さんとした黄金づくりのお顔のこまやかな刻み目にも、もはや古
 い埃ほこりがつやをつくつて沈んでみえ、筒井は両のたなごころに据すえ
 てしばらく、じつと拝するがごとく見み惚ほれた。そんな敬けい虔けんな筒
 井の眼のつかい、手の敬うやうや々々しい重ねようはこのみ仏をまもるに
 は、筒井より外にその人がらがありそうも覚えなかつた。彼は筒
 井の嬉うれしそうな様子に信頼する強いほとばしりをその眼のなかに
 見入つた。

「よくは覚えぬが母が父のもとに見えたときにお持ちになつたも
 のらしい、母がよく埃をはらい御おんみがきをかけておられたことを
 覚えてゐる。」

「母上様におことわりを申さなければなりません。」

「そなたが肌身はだみ離さず持つていてくれることは、母上にもきつと御本望でござろう。」

「あまりに不束ふつつかにて恐れ入るばかりでございます。」

筒井は父母の位牌いはいの前に行き、額ぬかずいて永く頭をあげずに禱いのりの時をつづけた。それは親しいものの限りをつくした、見ている、心に重みのくるような礼拝のよろこびをあらわしたものだつた。

その夜、はじめての時雨しぐれの訪ずれがあつた。二人はだまつて灯にさしむかえになつたが、やがて彼は別れたら必ずきようの日をおたがい心して覚えて置き、便りはつでのあるごとに怠りなきように筒井に注意した。

筒井はその時はじめて^{つよ}勁く語調をあらため、彼の腹にこたえるように申し出たのであった。それは思いかけぬ言葉の剛直さをあらわしていた。

「あなたもわたくしあることをお忘れなきようにお問い合わせいたしません。」

「そなたもだぞ。」

「わたくしのことはお心にのこさずにどうぞ。」

「いや、土くさき田舎暮しでは気がかりにもなる。」

「美しい人のたくさんおられる都のたつきこそ、わたくし恥かしながら心がかりに思いまする。」

彼は何となく男の本能から悸^{ぎよつ}乎とした。美しい人びとの往来す

る朱雀すざく大路を思うだけでも、永い間田舎に住んだ渴かわきがそこで充たされそうであった。そういうたまゆらの悸乎としたものは再び彼を捉えて、面おもてをくもらせるほどであった。

「都では我らを対手あいてにしてくれる者とてもあるまい。」

その夜はかつてないほど多くのしみじみした話が二人のあいだにあつた。男も凡すべてを信じてはいたが、ひとなみの気にかからぬほどの不安があつた。そのあるかないかの依りどころない不安は、いままでの、どういう不安にくらべても大きいものだった。

二、三日の後、晴れた日に彼らは別れの宴のようなものを催したが、赤の飯を炊たこうとしてもその年の虫の害は、畑あずきに小豆あずきというものが一粒も実らなかつた。隣近所に男は頼みに行つて見たも

ののおよそ小豆と名のつくものは、依然、一粒もなかった。ただの小豆ではあったが幸さいさき先を祝うものゆえ、夫の失望は大きかった。小豆の飯の好きな夫に、そのわかれの飯に小豆を混まじえないことが筒井にも悲しかった。

「どこの家にも一粒もない。」

夫はそういい、せめて鉤なたまめ豆のようなものもないかと尋ねてみたが、これもやはり一粒もなかった。それほど恐ろしい暴風のような蝗いなごの大軍の襲うたこの地方では、青いものも後蒔あしまきの分だけがそだったただけだった。

筒井はどこやらに小豆が戸棚か、どこかにしまわれてあるような気がして袋戸棚や茶棚をさがして見たが、どこにも紅くれないをした小

豆は見当らなかつた。

「もういいではないか。」

「いいえ、たしかにどこかに、小豆があるように覚えがございませす。ちよつと、わたくしに考えさせて下さいませ。」

どこかにしまつてあつた。筒井は心覚えのあるところを捜して見たが、どこにも見付けられなかつた。だが、この遠いような近くにあるような考えはどうしても諦めかねるほどの、心あきらにのこつている小豆であつた。

「ええと、どこかにあつた。」

彼女はその時、やつと考えあてて、膝を叩たたいて小さいよろこびの声をあげた。男は驚いて筒井の顔をみた。

「(い)ぎいました。」

「どこに。」

「只今持^{ただいま}つてまいります。」

彼女が立つて行つたところは雛^{ひな}のしまわれてある箱をつんだ戸棚だつた。そこにある幾つもの箱のなかの別な小箱をかかえ、筒井は夫の前に置き、鋏^{はさみ}を用意してふたたび、箱の前に坐つた。不思議そうに見ている夫の前に箱から取り出したのは、五つの袋からなる美しいきれで縫つたお手玉だつた。

「ほら、小豆にございます。」

袋の糸目をとくと、なかから美しい紅^{べに}のつやを持ち、芽割^{めわ}れに白い縫糸を見せた小豆が一杯につまっていた。雛^{ひな}の日の娘らのあ

そぶお手玉だった。

「これは有難い」

男は驚いてこれに気のついた筒井の智慧ちえに、いまさら眼を見はる気持だった。五つの袋を解いてしまった時に、盆の上には夥おびただしい小豆が一杯にあふれていた。しかも去秋こぞの小豆は一粒として傷いたんでいず、去秋の美事みごとな近年にない豊作のあらわれが、この小豆にさえ見られた。

「これで赤のご飯が出来ました。」

彼女のよろこびは彼女をなみだぐませたほど、真剣なものだった。こんな遊びに縫ったものに、祝いのものが炊かれようとは、誰も知らなかった。ただ筒井の叡智えいちだけがそれを教えたのだ。間

もなく赤の飯はふつくりと炊かれ、小豆は赤ん坊のようにあどけなく柔らかく蒸れて、あまい、淡さりした餡の深い味を蔵していた。かれらは、明日は別れなければならぬひと時の食事に、塩した干魚をかじりながらも幸福だった。小豆があつたからには我らは永く倅せになるだろうと男がいえば、女はお手玉の五枚のきれを町重にたたんで、そしてあやまるようにいった。

「小豆を見付けましてまたしまつて置いてやります。」

この何者に対つてもない礼儀ある言葉は、こんな日にこ
とさらに心に応えるものがあつた。かくて貧しい埴生の宿のひと夜を彼らはゆつくりと睡るべく、寝所にさがつて行つた。そとは深々としたしぐれが罩めるように降りつづいていた。

津の川波は鱗がたの細かい皺を見せ、男の古い狩衣には少し寒いくらいだった。青い下帯をしめた彼は渡舟を待つあいだ、筒井と土手に腰をおろして憩んだ。同じ古い桂に釈迦仏を懐中に秘めた彼女は言葉すくなに夫とならんで、かぞえ切れない鱗波の川一面にある文様を見入った。

渡舟は同時に東と西からその姿をあらわし、この岸べに着くと同時にまた立つはずであった。筒井はなにもいうことがなかったが、人はこんなふうにして別れるものであること、すこしも行末のことに愁いをもたずにいることが甚だしい間ちがいではなかるうかと、そんなことを漠然と波を見入っては考えていた。一体、

こんな寒々とした少しの温かみのない曇り日の景色というものは、どうしても隠しきれぬほど惛^{わび}しい感じにとらえられるものであった。先刻から夫の顔をできるだけ見ないようにつとめていたのが、ふいに見るでもなくその横顔を見てしまつて、なにか驚くようなはつとした気持であつた。茫^{ぼん}やりとおなじ水の面を眺めている夫は何を考えているのか、少しも生氣というものがなく顔は青みをふくんで淋^{さび}しい以上の淋しい感銘であつた。こんな虚^{むな}しい何も浮んでいない顔を見たことがはじめてだつた。どんな困窮の日にもこんなさびしい顔色はしていなかつたのだ。もう、別れるからだろうか、そうとしか、筒井には解きがたい空虚さであつた。

渡舟は同時に着いて乗客をすっかり吐き出して終^{しま}うと、舳^{へさき}を上

流と下流に向けてふたたび客を乗せた。

「さあ、」

男はなんとなくそういつて起ち上り、女を先に立たせた。

「では氣をつけてな。」

「はい、おしずかにお越しくださいます。」

筒井は腰を折つて一いっしゅう揖ゆうした。男もちよつと頭をこころもち下げるようにして、それぞれの渡舟に乗りこんだ。筒井は夫の顔を先刻のようにもはや見ることはなく、夫の烈しい眼がしらを受けるだけであつた。

渡舟はぽんと岸辺をついた竿さおの勢いで、水の面にすべり出た。

筒井の渡舟は西の方に舳へさきを向け、男の渡舟は東の上流に向いて舳

を立てた。二人は眼を合せて合図のように頭を下げ合ったが、下流に向う筒井の渡舟は俄然がぜんとして舟脚ふなあしを流れにまかせて、もう、かなり距へだたつて行つた。それはわざとしたような迅はやい舟脚で、はなはだ卒そつ気けないものであつた。それにもかかわらず上流に逆のぼつてゆく遅々たる舟脚は、しかも下流に向いて坐つている男には永い間、筒井の渡舟が眼を放れずについて来てならなかつた。

「あの女にはもう再度にどと逢あえないような気がする。」

男はなんとなく口のうちにそう自分自身むかに對つてはつきりと言ひ聞かさなければならぬような気がした。それほど荒涼無辺なところころに彼の直覚がはたらいて行き、彼はそこで急激な絶望をありありと感じ出した。女の乗つた渡舟はそれでもまだ眼路めじの果にあ

つて、一つの黒い点になったかと思うと川すじが迂曲^{うきよく}して、突然見えなくなつてしまつた。彼はその時あまりに熱心に見つめていたため、頭がしびれたようになってもう少しで渡舟のへりから落ちそうな不覚をおぼえたのであつた。そしてそういう不覚の感じは一層彼から彼女を失^{なく}ささせる、変な暗示のようなものをその心に殖^ふやして行つた。貧しくとも津の村ざとにいれば白い菜をたべていても、彼女と一緒にいられるではないか、彼女を失うてしまつたら再びああいう女は自分のところに来てくれはしないであろう、彼女を失うために彼は都にのぼつて行くようなものだ。彼の焦^{しょうそつ}燥は彼のなかに荒れ立つてゆき、彼は身動きもせず^{たの}に愉^{たの}しい五年の月日をあとぐりし、それにふたたび逢^あえなくなればど

うなる自分であろうか、筒井がいるために貧窮すら^{こた}応えず、そして彼女がいたために多く掠^{かす}めた畑物の咎^{とが}は、百姓だちから許されていたようなものだった。何と多くのかなしい百姓だちが筒井をただひと眼見るために、まずしい彼の家の垣根越しに声をかけて行ったことであろう、かなしいそれらの百姓に筒井はみんなとおなじに均^{ひと}しく良い挨拶をあたえていた。そして青い川波に眼をおとして茫然自失するような状態をつづけて行った。彼はくるしげに、こういってもう恥をわすれているようだった。

「ねえお前、なにか答えてくれてもよさそうなものではないか。」この急激におそうた哀別は、男をふたたび茫然自失のあられない世界に^お趁い込んで行った。自分にすぎた筒井であっただけ^{まば}眩

ゆいばかりの妻を得ていることが、どういう倅しあわせにも増して底の深い倅せであつたことであろう。かなしい働くだけでつかれた百姓だちは、垣根越しに声をかけて過ぎた。

「筒井さま、こんないお天気にはわしらは働くより外に考えようがないとは、これは一体どうしたものでしょう。」

「お百姓衆、わたくしとてもこんないお天気には遊ぶことなぞゆめにも覚えませぬ。あなた方はおはたらきになる土地をお持ちになるが、わたくしは作るにも種子も土地もございませぬ。」

「なるほど、わしだちはとんだ間違いを考えたものや、では、あとで種子をおとどけ申しませう。」

すなおに百姓は会釈して去つた。

男はそんないい妻と自らえらんで別れるのだが、もう一さいが遅すぎた。もはや、渡舟さえも見えなくなり、男は齒をくいしばつてうつ向き、人に顔を見られぬように^{すす}啼り泣きをした。白い妻のただむき、うなじ、それらにこそ、男はわかれて後にあえぬことが深い悲しみになった。人はおなじ白いただむきを世界にもとむべきものではなく、そんな貴いものはあちらこちらにあるものではなかった。

土地がかりの官人^{かんにん}の家は、広大な石垣をめぐらした川べりにあった。筒井はすぐ見出されて仕えの女のなかでも、重い地位をあたえられ、奥の仕えばかりを勤めることになっていた。主人は

津の川べり一帯の土地を持ち、息子はその父の管理している土地の手伝いをしていて、まだ若い光った額をもった青年だった。この青年は筒井が仕えをつとめるようになった最初から、筒井に心して使うようになり、あまりに^{ていちよう}叮重なあつかいに困るほどであった。食物、睡眠、衣裳、暖かい庭、暇のある勤めはたちまち筒井を美しくふとらせ、毎日の^{もくよく}沐浴はつやつやした肌^{はだ}に若返らせた。筒井はこういうゆとりのある生活をしたこともなければ、また、かつて一度も想像したこともなかった。これが仕えの勤めであるとするれば、こんな安易さはほかに求められるものではなかった。ふとしたことから第二番目の^{むすめご}娘^ご子に、筒井はその和歌の出来を見てやってから、青年は一層筒井をたいせつに応待した。朝の白^さ

湯、昼下りの白湯にも、筒井は呼ばれて、主人、娘、息子の端の座にすわっていた。やがて主人が去り娘が去っても、息子は後始末をする筒井に、そこにいよといい、ふたたび白湯をいれさせた。息子はよくするように眩まぶしげに筒井を見遣みやつて、尋ねずにいられぬふうにいった。

「あなたはいままでに何をしていられた方か。」

「名もなくはたらいていた普通の女にございます。」

筒井は男と暮らしていたことは、女としてはいえなかつた。

「どういうところにはたらいていられたか。」

「津の村の方かたにございます。」

「何をしていられる方？」

「官の職をのいていた方にございしましたが、再び都にのぼられた方のお家につとめていたのでございます。」

「よい方であったか。」

「はい、それはもう。」

筒井はともすると変りやすい顔色を心で隠すようにした。男が立ってからもう三月になるが、便りも消息もなかった。三月といえば百日に近かった。あれほど誓いあいながら何の知らせのないのは、官の仕事になれないためであろうと、そう思うよりほかに筒井は解きようがなかった。十月十一月十二月も終り近く、あと二日でもう正月になろうとしていた。

「父上もそう申されていられるが、この家に永く勤めていられる

ようをお願い申す。」

「わたくしごときものでお宜よろしいようでございましたら、永くおつかい下さいませ。」

「みな近くの農家の者ゆえ、あなたがそれをつかいならしていた
だきたい。」

「はい。」

二日の後、静かな元日がおとずれた。筒井のために作られた衣裳はまるで御娘と同じ模様の襲かさねも青い練絹ねりぎぬであつた。筒井はそれを携えた御娘に辞退して、押しやつて勿もつ体たいながつた。

「わたくしはただの仕えのものでございます故、これだけはお受けできません。」

生れてはじめて見る美しくまばゆい初春の衣裳であつた。

「いいえ、これは父上と兄上がお見立てであそばしたものの、正月には着てたもるように。」

それはもう断れない身丈もきめて作られた衣裳だつた。

元旦の朝の餉かれいには、筒井は主人といつしよの座にあてがわれ、

ひじき、くろ豆、塩たいした鯛、雑煮ぞうじ、しかも、廻つて来た屠蘇とその上

の盃さかずきは最後に筒井の膳ぜんに来て、彼女はこういう家族の待遇に心と

きめきながら、優しく盃を受けなければならなかつた。しかも穩

やかな微風すらない元旦は暖かいほど、庭一面に日があたり、不

意に大きな翼の音がして一羽の大鳥がさつと庭ぞらを掠かすめて渡つ

て行つた。

「あ、鶴じゃ。」

主人は盃を持ったまま簀すの子に出、青年も娘も出て行つた。真白な大鶴がななめに中の島をよぎり、低く庭の上をすぎて行つた。筒井はそのまま腰をまげてかがみ、かがんだときに微かすかではあつたが、大きないかにも温かそうな白い鶴のうしろの翼を見受けたのであつた。

みな座にもどつた時に誰の胸にも、筒井が坐つたまま謙遜けんそんに鶴を見送つていた落着きをこよない静かさに感じていた。そしてこの時代の礼儀の言葉としての筒井の言い方にも、このあたりに稀まれに見る女の気高さがこめられてあつた。

「御めでたい鶴にございます。」

「ありがとう、そなたという鶴もいてくれて双鶴そうかくじや。」

主人はそういう息子をちらりと見た。青年はべつに気色けしきばむことはなかったが、機嫌のよい頬の色をしていた。そして彼は少しあらたまつていった。

「母上がいられぬものだから父上も不自由していられます。」

「お亡くなりあそばされたのでしょうか。」

「もう二年にもなります。」

青年はそれだけであとはいわなかった。

「存じませぬことながら失礼申し上げました。」

筒井は手について悼いたみの言葉をのべた。父という人は満足げにその言葉を受けて、軽く頭をさげた。

「母のない家というものは灯とも火しびを失っている居間のようなものだ。そなたがいてくれてめでたい元旦をことほぐことができた。」

「わたくしこそこのようなおうたげに列つらなりをいただき、お礼の申しようとでもございませぬ。」

「ゆるりとされるよう。」

「ありがとうございます。御衣裳もいただきましてございます。」

愉たのしい夜は雪にもならず、みな歌をものして過ふごし、更ふけて筒井は下くだがろうとして仲の遣やり戸どをあけようとすると、よい月夜になつていた。

「誰どなた方様。」

筒井は小さい肩をすぼめ、身をまもろうとすると、狩かり衣ぎぬを着

た青年が立っていて、隠れもせずに行った。

「よい月夜になり申した。」

「はい、思いがけないよい月にございます。」

青年の顔は真白だった。筒井はこういう月をあびた男の顔を見たことが初めてで、驚いて見直したほどであった。

「明日はみ社やしろまいに詣ろう、御身も見えられるように。」

「はい、お供させていただきます。」

筒井はふと思いいでて、ほかに物の言いようもなく、

「御おんかさね襲おんかさねいただきお礼もまだ申し上げないでおります。」

彼女は襲に手をさわり腰をかがめた。春の野の萌黄色もえぎいろの襲は月の下では、ひと際きわ、柔らかい触りさわを見せていた。

「お合いでよかった。桂もそのうち吩咐いいつけます。」

「わたくしごときものに御心労おそれ入ります。」

「妹ともよく似合のものをお捜しあれ。今宵こよいのお身はまことに美しかった。」

「そのようなこと仰おおせられては、ゆめなりませぬ。」

筒井はなんとなく硬い顔付になった。心に恐ろしい脅おびえがあった。その脅えははなはだ道德的なものだった。

「そなたが来てくれてから父上も大変元気になられたし、我らも息を吹き返した思いを致している。こういう辺土へつちにいて母のいない家というものは、身に着けるものも見当らないほど淋さびしいものでござる。」

「お察しいたします。」

「それに川べりの冬は寒く気も沈むようなことが多い、そなたが見えられたこの冬は賑にぎやかに歌など夜々のなぐさめに、ものそうではありませぬか。」

「嬉うれしくぞんじます。」

青年の顔色は青く寒げに見え、筒井は一種の願い事のようにやさしくいった。

「お風邪かぜ召すといけませぬ。そこまでお見送り申します。」
筒井は先に立った。

「お見送りはおそれ入る。」

「また明日という日のおとずれもございますゆえ。」

こうまで優しい申し出には青年の熱い気持も、そのまま心におさめ、今宵は引き取らねばならなかった。西の対たいで二人はしずかに別れた。

「筒井殿、我らこころよく寝やすみますぞ。」

「おしずかにお寝みあそばせ、ご覧ろうじませ、あんなに明日はよいお天気あめのきざしにございます。」

「美しい星だ。」

星は冬が深くなるほど冴さえて透とおつて見え、美しくなるものだった。男は戸のうちにはいり、筒井はおのが部屋に引き取つて行った。

筒井はきょうひらけた世界に向い、自らきびしく責める気持を

経験した。避けるべきものは避けなければならぬ。筒井は寢所にはいるとおのずから自分の呼吸いきづかいの若さを知り、そしてこがねのみ仏の像を抱いた。寸にも足らぬものであつたが、男もこの中にいると思わずにいられなかつた。おん肌をまもらせたまえ。

「おん肌をまもらせたまえ、あわれなるものの肌をまもらせたまえ、わがあやまちなきようめぐみあらせたまえ。」

筒井はこういのりいう禱いのりに似た声もひくくささやいて見ると、晴れがましく明るい気持ちになりからだが真白にかがやくようで、もつたい勿もつたい体たいがないみ仏の光をうけるような世界のあたらしさを感じた。そしてそれは無名の青年があらわれたことによつて、この世界のひらきかけたことも知らなければならなかつた。

秋はふたたびめぐつて二年目の正月になつても、都から男の便りがなかつた。筒井は津の川べりの渡舟を待つあいだにちらりと偷み見た男の顔の、あまりに空しい生気のないのを思い出すと、もう生涯会えない人のような気がした。たとえば、どんなに忙しい生活をしていても一片の便りを書くくらいの暇があるはずなのに、もうまる一年も何もいつて寄越さないので、深い原因があるに違いない、その原因とは一体何であろう、筒井はその一つは死というものに捉えられた彼ではなからうかと思ひ、も一つ外の原因にはなんとなく別の女おんなけ気を感じた。だが、そういう浅薄な人ではなかつたはずだ。それでは死か、死ぬような人でもない、

もしそうであつたら誰からか知らせてくるはずであつた。やはり女であろうか、筒井はそれも信じられぬことに思われたが、ああいう変に気の好人というものは自分で確しつかり乎かしているつもりでも、つい気の好きから人に愛されるようになる。筒井自身が愛していたようなそれが男の上にあたらしく訪ずれているのではなからうか、筒井はいつもこの二つの問題のあいだを殆ど一年間往來ゆききして、いつも解決のつきようがなく深くはまってゆくばかりであつた。

ことしの正月は桂つちぎしわをつけた筒井は、もう土地がかり官人の家の仕えの女であるよりも、娘子を見るような品の高いものであつた。彼女は一家の着るものから調度の類、諸儀式の器物、塗籠ぬりごめにあ

る品々、とりわけ青年の身のまわりの物はすべて筒井が見ていて、筒井がいなければ一家の器物の一つを尋ねるに、全部の長持や箱、棚の中を捜さなければならなかった。あこには何がはいつていて、ここ此処には何がしまわれているかということまで、筒井は誦そらんじていた。土地のことで忙しい父と息子は、もう筒井がいなければ一日として送れないまでに、筒井はこの家にいなければならぬ女になつていた。それに食事のことも筒井の指図がなければ何をつくり何を食うべきかも、外の仕えの女は知らなかった。ほかの仕えの女は筒井の指図によつてはたらき、そしてそれがなければ外の仕えの女は指をうごかすことも出来ないほど、筒井を調法がり頼りにしていた。こういうあいだに筒井の愁いは少しずつ剥がれ

るときもあるにはあつたが、その全部を忘れるということは絶対になかった。厨くりやの夕暮、塗籠ぬりごめの二階、簀すの子のたたずまい、庭の中というように、至る処ところに筒井は夫の呼吸を感じ、そのたびに少しきびしい声音こえになつて筒井は胸の中でいった。

「あなたさまは今何処どこにいられるのでございます。一日も早くおたより下さいませ。一日遅おくれれば一日だけ恐ろしいことが近づいてまいるような気がいたします。人はなさけの深みにどうしても躓ついてゆかねばならないように出来ていて、それを逸そらすことができないようになつてゐるものでございます。それを逸そらせるためにはあなたさまの御無事のお便ふみりをただかなければなりません。ただ、一枚の紙きれのお文ふみでたくさんにございます。早く早く、

一日も早く、なにとぞ、なにとぞお便りをしていただきとうぞんじます。わたくしはどうしていいかさえ分らないくらい迷っています、ときにお便りだけが迷いをきつぱりとさましてくるような気がいたします、早く早く、一刻も早く、こういつているうちにも早くお文をおつかわし下さいませ。そうでなかったらわたくしはご親切なこの家の方々のお心から、もう離れることができなくなっているのでございます。それはあなたさまという方がわたくしにあるということあかを明らかにしないためかも存じませんが、そうでなくとも、この家にはもはやわたくしという女がいなければ何一つするにも、出来ないようになっていきます。たとえば、あなたさまがお越しになっても、わたくしは人の情としてすぐこの家

を立つてしまうことはできません、することをしてからでない、
とうてい見過しにはできないような家庭の事情でございますもの、
どれだけ離れた考えをもつていても、気の毒にもさびしい方々を
そのままに置いて、わたくしだけがこの家を去るということはで
きませぬ。」

「もう二年めの正月のきよう、御息子様の貞時様はわたくしを
もとめられ、わたくしを求められることによつて一家のさびしさを
救い、お父上の身のまわりの心づかいをしてくれるように仰せ
られました、わたくし、神仏に誓ちかを立ててあと一年は人様に従つ
くことのできない身分であることを申し上げて置きました。それ
は母が大病のときにおん命おとどめくださるようなれば、神仏へ

のおん礼のしるしとして三年のあいだ、殿方にまみゆることなきをおことわりしてあるのだと、お身様にまいる前のことを申して、貞時様のお心をしばしとどめていたのでございます。貞時様の申されるようにはそのような心ざしを持たれるからには、なおのことわが願いをかなえてくれるよう、あと一年の春秋は決して遅いとは思わぬと仰せられ、わたくしへの熱い心をじつと抑えておられるのは、見ているも悲しくおつらいことに思われます。あと一年くらいはすぐに経たち、お身様のお便りがなければそのまま何時いつまでもお待ちする心でいても、世のさだめには勝つことができませぬ。女はただの一日一刻のあいだにもその運命さだめがどう変わるかも分りませぬし、変わるものもさだめのつねのようにおもわれます。

お身様みさま、みやこに上られてから四百何十日のあいだにお文おかきあそばすひと時もなかつたとは、よもやお身様も仰せられぬでございましょうに、絶えてお便りなきはお心のすみにあるわたくしのことも、やや忘れがちな日々、忘れるでもないようですれほど深くは心にとどめていられぬ日々もあつたように思われます。それはよく分つていながら四百何十日もお便りなきはあまりに悲しく待ち遠く、また、あまりに酷ひどうございます。津の国の春秋に、人のなさけを制しながらじつとお待ちするわたくしは、どれだけの春秋をお待ちしていいかさえ分らなくなる時がございます。貞時様はいつまでも待つと仰せられ、そしてあなたさまはどこにお越しかも分らず、また、おん健やかにおすごしあるかも分らない

このごろ、女としてこういう時にどういう考えを持つていたらいいかも、しだいに分らなくなつてまいります。ことに津の国の田舎とちがい都にあらせられるあなたには、その毎日にも何彼^{なにか}と心の鬱^うさの紛^{まぎ}れることもございましょうが、青い蘆荻^{ろつき}のそよぎばかり見ていては心は毎日滅^め入^いつてしまふばかりでございませう。

「ただ一言ゆめにでもあらわれてお聞きしたいことが、筒井の胸にございます。筒井はただそれを知りたさにそのみを念じているのでございます。お驚きくださいませ、あなたさまは本統^{ほんとう}にお健やかでおわすのでしょうか、それならそれ以上の倅^{しあわ}せはないとしても、ひよつとしたらお健やかでないのではないのでしょうか、も一つつき込んで申し上げることにお許しがあるならば、あ

なたさまはもはや在世あそばさないのでございますまいか、もはやもはやお健やかなお顔色もなく、おなつかしい声もなく、他界あそばしたのではないでしょうか、わたくしの心がかりはそれのみにございます。それはあまりに疎遠そえんな感じであつてのあなたさまらしくないほど、お便りもなくなっていることからわたくしにはもはやお逢いできないように思われてならないのでございませう。渡舟のお別れでもそのような気がいたしておりました。あなたの渡舟が上手にのぼってゆくのをみつめながら、これは永いお別れになるかも知れぬと、そんな気がいたして悲しゅうございまして。それなのに、その不倖ふこうがみんな當つていまはあなたさまにこういう悲しい御在世であるかどうかさえ、疑わずにいられぬよ

うな物の終りをかんじるようになりました。あなたさまはまさかそんなことはないと考えましても、それをお尋ねしない訳にまいらなくなつたのでございます。どうぞ、ゆめにでもお現れになりお健やかなお言葉を仰おっしゃ言つてくださいませ、それでなかつたら筒井はどう考えていいかさえ、もう、分らなくなつていたのでございませ。ひと刻ときのゆめに、昼深くいときのうつつにもお現れくださいませ、庭のさまよいにでも、厨くりやにはたらいにいるときにでもただそのひと言をお漏もらしくくださいませ、声あらば声をとどかせ、たましいに生きのあるものなら、うつつに、ゆめに、そらごとのおもいに、早く早く、ひと刻も早くおしらせくださいませ、ああ、あなたは本ほん統とうに生きていられるのでございますか、生きていら

れるなればなぜにお文おつかわしくださらないのでございますか、わたくしのこの思い、この声、この嘆き^{なげ}悲しみがとどいてゆかないのでしようか、声よ、いのちよ、嘆きよ、早くあの方のもとに飛び立って行きわたくしの悲しみを知らせてたまれ、あせりにあせってどうにもならない焦燥のすべてを知らせてたまれ、人の一心のとどかずば止まざるものを今こそ知らせてたまれ。」

筒井はひとり激しく胸のなかでくり返し、くり返し呼びつづけるような思いであつたが、そういう思いの後は酷い^{ひど}疲れがして、めまいのようなものが感じられてならなかつた。その時、貞時は庭のなかの姿を見出すとふしぎそうに筒井の顔色を見直した。かつてない深い物思いが皮膚を澄ませ、物悲しい青みをふくませて

いるからであつた。貞時は手をあげてやや遠くにいる筒井を招き、筒井はうなずいて近よつて行つた。

「遠くからでもそう見えたが、どうも考えごとをしていられるな、考えても詮^{せん}ないことは考えなさらぬ方がいい。」

「はい。」

「過去のことならなおのことでごさる。」

「では貞時さま、おたずね申し上げますが、人は生きているあいだはゆめに死を感じるようなことがございますものでしょうか。」

「生きている人も死ぬ人も、ゆめではどうあらわれても分るものではない。」

「さようでございましたか。」

「ただ生きている人はきつといつかは現われて来る。死んだ人はいつまで経つても現われて来るものではない、何かそういう人でもあるのか。」

「はい、友の身のうえのことを考えていたのでございます。」

「生きているならきつと訪ねてやって来ます。」

「……………」

「その友もこちらに呼ばれるがいい、女ですか。」

「はい、女にございます。」

「そなたのような友を得てその人は倅しあわせであろう。我らとてもそなたを友に得て毎日朝逢えるのが愉たのしくてならぬ。朝は夜中に待つほど遠い、遠いほど嬉しい、天明てんめいとともに我友わがともに逢えるこ

とは清い交わりではないか。」

「わたくしとても何気ない朝の麗うるわしきには、こころから嬉うれしくぞんじています。貞時さまのお咳せきのこえまで覚えましてございませぬ。」

「毎朝そなたの生けかえる花を見て、その日の我らのよろこびとしている。父上のお部屋にも花を生けてくれるそうであるが、あらためてお礼を申す。母上、御在世のような安らかなお気持ちでござろう。」

「お褒ほめにあずかるほどのことではございませぬ。」

筒井は貞時と話しているときに何かはたらき甲斐がいのあるものを感じ、できるだけ毎日たのを愉たのしく美しく掃はききよめたいと、仕えの

女の遊ばぬように心をくだいて、それぞれ整えるものを整え、纏めるものをきちんと纏めていた。貞時はあまりに筒井が頭をつか
いすぎはしないか、暇もなくはたらいでは手を傷めるようなこと
がないかと、それが気懸りだった。

「筒井殿、少しお憩みあれ。」

貞時はなにかを憂えるように、そう筒井を劬った。

「あとで憩ませていただきます。ただ今は筒井怠けていては皆さ
まの教えにはなりません。」

まめまめしい彼女は手をやすめることがなかった。まだ若い貞
時とはときに可笑しいくらい少年のような細かい気づかいで、筒井
が川べりに出て仕えの女らを指図しながらいるのを見て、茫々

たる津の国にすさむ木枯こがらしを厭いとうていった。

「筒井殿、お顔が荒れはいたさぬか、かかる日に表の用足しはお止めになされい。」

「まあ、そのようなことを仰おおせになるものではございませぬ。」
木枯にいたんだ筒井の顔は、桂うちぎの裏絹もみをひるがえすように美しくれないであつた。美しすぎるのに貞時の心づかいがあつたのだが、筒井は笑つてやはり止やめなかつた。

「暖かい方でなされい。」

「はい。」

そばに寄つて来た貞時は、いかにも、世なれぬ無ぶし躰つけさで筒井に求めた。

「手をお見せ。」

「はい。」

「そのように荒れているではないか、手はたいせつになさい。」

「まあ。」

筒井はあわてて羞はずかしそうに、見詰められた手を引き込めた。

引き込めたが、貞時は手の荒れだけを注意したにすぎないので、筒井自身は彼よりずっと心に何かさまざまな覚えのある女であることを知り、貞時の心のうるわしさをあらためて覚えた。

「では手はたいせつにつかうようにいたします。」

そういつて、彼女はなんとなく笑い、貞時もなんとなく答えるように笑った。ふと、筒井は一たいこの手は何人だれの手であろうか、

何人が触れてくる手であろうかと、心のずっと奥の方で彼女はこつそりと考えた。同じ思いは貞時にもあつた。彼女の手の荒れや顔の荒れを怖れ、それを防ぐようにいう貞時はもはや筒井の手も顔も、そうしてその心も彼自身のもののように思われるからだつた。その考えに間ちがいがあるうとは青年はかんがえなかつた。

「筒井どの、いつかはお身の心まかせになるときがあるだろう、と思われぬか。」

「そのような考えをいいあらわすことは、わたくしとして控えなければならぬような気がいたします。」

「いや、そう言われるな、この家も、我らも、庭も、そなたのものになるときを我らは望んでいる。父上も、そして妹も。」

筒井はなにもいうことがなく、近づいてくるものをいまは静かに見まもつていなければならず、それがどう展ひらかれて来ても、筒井は胸をひろげてうけとるよりほかに、彼女のすることはなかつた。人は運命を自分でひらいてゆくべきものだが、何と筒井自身はそこから多くの運命がひらかれ訪ずれて来ることであろう。

春が過ぎ夏がおとずれ、水郷の祭の宵よいであつた。社やしろ詣まいりの戻りの女おんな車くるまがつづいて、いずれが筒井の車だか分らなかつた。貞時はさがしようもなく幾つかの女車を遣やり過したなかに、薄うす葉よを籠かごのようにふくらがし、元の方を扉ゆわに結ゆわえた女車があつた。薄葉うすよの中にあまたの螢ほたるが入れてあるらしく、そこだけ、青い灯ともし。

火びのような光が胎はらんで、明りにかわるようにしてあつた。しかも、その扉のすきまからは匂におうような顔がさしのぞいていて、仄ほかではあるが時々強い光を面おもてに受けていた。貞時は、女車のそばによると、失礼ではござるがお尋ね申すと断りながらいった。

「筒井殿ではござらぬか。」

「はい。」

そう答えた彼女は扉をすこし開け、開けたときに病やましげな悩ましい蛍の光の明滅は、筒井の片頬をうかべ上げた。

「お分りでございましたか。」

「この通りの雑ざつ沓とうでよく見分けがつきかねて困っていたところ、薄葉の蛍でさてはと思ひ申した。」

「往ゆきの道すがらとらえた蛍がこのように役に立たうとは思ひもかけぬことでした。斯か様よういたしておけばお心づきかと存じていたのでございます。」

「よい思いつきであつた。そなたでなければ思ひいたらぬこと。」
「あまりの雑沓ざつさつにて似も似た女車ばかりでございますもの、明りがそとからお見えになりました？」

「片扉かたひらがそつくり浮きあがるほど明るく存じる。」

「このいたいな光の虫をごらんあそばしませ。」

「なるほど、虫でもこういう美しいものもあるものだ。」

薄葉うすはをひらいて見ると、十数ひき疋びきの蛍は、月草つきくさの葉の上にとま
り、静かに灯りをつぎつき点ともしていた。しかも、今年の蛍は例年

にくらべて、ゆたかにも大きく育っているらしかった。

「我ら蛍に手をふれたことも十年振りでござる。童わらわの頃に宵々にはよく狩りに出たものだが、いつまでも童のようにしてはいられぬ。美事みごとな蛍だ。」

薄葉のすきをのがれた一足は、いかにも羽根のある虫らしく高慢にも、しずかに立って行つた。飛びながらも明滅する光は、きれぎれに青い線を空に曳ひいて上つた。それは、消えたり点ともれたりするものの美しさであつた。

「今宵こよひはもそつと蛍狩りをいたそうではないか。」

「そなたは蛍のいるところで車を駐とめるよう。」

「わたくしとても絶えて蛍狩りなどいたしたことがございませぬ。」

螢ほたる 頃ころ になればこの夏こそ思いをとどけようと考えましても、

月日はいつも螢ほたるにおくれがちにございます。」

「そなたは螢ほたるを好いてか。」

「螢ほたるほど美しいものはなくたらちねのところより心をよせておりま
す。」

「では存分に今宵は螢ほたるとあそびたわむれ申そう。」

「嬉うれしゆう存じます。」

幾いくすじもある小川のほとりで車は駐とめられ、夜露よるいに冴さえた螢火えび火
は眼あやも綾あやなるほど、草の上にあつた。萩はぎ、桔梗ききよう、女おみなえし郎花らなはな、り

んどう、そういう夏と秋とに用意された草々には、まだ花は見ら
れなかつたが、その気けはいは充分にあつた。

「貞時様、これご覧ろじませ。」

薄すすぎの葉のうらにすいる蛍を上の方から見ると、葉の緑を溶といて光る美しさは眼も青くそまるばかりであった。彼はこうして何のためか、何の音楽はやしをかなでるつもりか、夏のひと夜を点ともれたり消えたりしているのだった。哀れといえばいと哀れ、賑にぎやかであるといえば、さわに賑にぎやかだった。

「こういう衣裳はお身によくうつるであろうの。」
 「衣裳があまり美しくてはわたくしのようなものでは、おかしくてなりませぬ。」

蛍は二つの薄葉の籠にほとんど一杯にとらえることができ、筒井のてのひらも蛍くさくなるほどだった。袖そでや履物はきものも夜露にぬ

れ、筒井はちいさいくさめい噓をしたほどだった。彼らはやっと更ふけた星を見上げた。

「筒井殿、もう二年も半ば過ぎたが、お身は見違えるようになられたぞ。」

「どのように見違えられますか。」

「美しくなられたと申すのだ。」

「たわむ戯おほれは仰せられますな。」

「嘘ではない他の人びともそう申している。こういう童のような遊びをすることもそなたがいられるからで我らあらためてお礼を申す。」

「いいえ。」

彼らは車をあとにして土手のうえを歩いて行ったが、筒井は直覚的に何か恐れに似た嬉しさがきようきよう恟々として襲うて来ることを感じた。それは貞時が永い二年のあいだ筒井からの返事を待つてゐることであつた。彼は彼と一緒に暮している安易さのためか、筒井から快い返事のあるまで、少しの乱れを見せずには彼は待つていた。

「筒井殿。」

「はい。」

「すぐ秋になり申す。そしてまた冬がおとずれて来ますの。」

「はい。」

「父上も早くそなたからお返事のあるのをお待ちのこと承知いた

されるであろう。」

「はい。」

「間もなくでござるぞ。」

「はい、しばらくのご猶予をおねがい申します。」

「そなたは神仏に誓いを立てたと申されたな。」

「はい。」

「大祓おおはらいして解くことができるではないか。我らの倖しあわせは神仏

もご嘉納かのうあらせられるであろうが……」

「いいえ、それは恐れ多くて筒井にはいたしかねます。」

「ではいつまでも待つことにするぞ。」

「はい。」

女車は垂扉たれどをあげ、筒井は腰をおろしてから心は一杯であった。あれから二年まるで便りがない男にどうつなぎを結ぶ自分であらう、生死もわからぬ人をあくまで待ち抜くのが女の道であらうか、ともあれ、三年は静かにならだをまもらねばならず、それをそうしないということは筒井の心が済まされなかつた。そして不思議に二年の半ばをすぎたいまは、男の呼吸いきづかいがしだいに筒井の身のまわりから、濡みがしみずまるように遠退とおのきつつあつた。そしてこれは詮せんないことだつた。男の何かに確しつかり乎とつかまつていようとする筒井には、妙に貞時の感覚とか印象とか親切さが日を趁おうて加わり、解おきがたいものになつていた。貞時の父は筒井を呼び改めて家族の一人として迎えたいといい、もう、精神的に

も、情の深さからも、不倖ふこうな一家の事情からも、筒井は言い逃れはできないようになっていた。その心苦しいなかには、何か明るのぞみい望が前の方にあることも、まだ若い筒井の眼に見えずにいられた。人はいかたがう中しあわに倖せを求むべきであろうか、人は倖せになるために生きるものであるうか、人は決して倖せを避けて通る者ではない、花を見ないで道を通ることはできない。

「筒井殿、夥おびただしい蛍を見られい。」

前の車のなかから貞時がこう呼ばわり、筒井は垂扉をあげてあおぎ見た川べりの草の上に、一面に光る蛍がちりばめた銀の縫ぬいのようにひらめいていた。ここは大川にそそぐ幅広い流れの裾すそだつた。車は馳はしり景は細かく移るごとに、変つた岸べの蛍が先刻見

た光とはべつなあたらしい光を点じ、そしてその幾つかは舞い上つていた。

「まあ、美みごとな蛍にございます。」

「我ら蛍の中を馳つてゆくようなものにござるぞ。」

前の車のなかの声は弾はずむような元気さで、声一杯に叫んだ。

「蛍はあなたさまによう見られたさに舞い上つております。あなたさまを蛍は好いでございましょう。」

あとの女車の中の声が穏やかにそう答えた。そして前の車の中のこえは一層大きく、一層氣負つた調子でいった。

「そなたも蛍にどこか似た方のように思われるぞ。」

「どこが似合いました？」

「美しさが青い光のように見え申す、頬のいろも似ている。」

先の車の声は笑いふくんで呼ばわり、あとの女車の声もおなじ
笑いをもらした声音こえだった。

「さよう仰おおせられても筒井はなびきませぬぞ、お心はどうにいた
だいてはいますけれど。」

「心をもらつて外のものをもらわないということはない、貞時、
一生かかってもそなたを逸そらすことは毛もう毫ごうござらぬ。筒井どの、
覚悟をされい。」

前の車の中の声は愉たのしげに歌うように叫んだ。

「覚悟はどうにいたしております。」

あとの車の声はやや低く、しみじみと答えた。

「たしかに覚悟はいたされてか。」

「たしかに。」

二人の声はふつつりと切れた。静かに車は土手の草の上をさつさつと踏み分け、一層、静かなあたりに息づかいを洩もらしていた。そして一いったん旦切れた声音はふしぎに秘密をまもるように、再び続けられることがなく、野の道を馳かつて行った。飛び交かう螢の数がすくなくなり、川は道からしだいに遠のいて行くほどに、町がちかづいて見えた。

「筒井どの、なにか話されい。」

「みんな申し上げました。筒井、なにも、お話申すこととてもなくなりましてございます。」

また一ひとしき頻り黙った刻ときがつづいたが、町にはいるには惜しいくらの愉しさを、きゆうに言葉でそれを表わさなければならぬのが感じられた。おなじ思ひは筒井の心にもあつた。ふたたび来ないような愉しさをここで別れるには惜しかった。

「此宵こよいの宮詣みやまいりは一生を通じて詣つて来たようなものだ。お身と我らの倅せをことほぐためにも宜よかつた。」

「筒井も心はればれしく斯か様な嬉よろこしいことは今までに覚えませぬ。それにあの美しい螢はよいおくりものでございました。」

「我ら螢を忘れてはならぬ。そなたの爪もいまに螢のように美しくともれることであらう。」

貞時はそういつて筒井の爪が、どうかして光に勾こう配ばいを見ると

きに螢のような光を見せることに、思い至った。それだけを見とどけただけでも、この宵は愉しい一つの物語のようにひろがつて振りかえられた。

三年めの正月が近づき、香料を袋に入れた薬玉くすだまが五色の糸で飾られ、柱から美しい造花にまもられて垂れた。元旦うたげの宴には屠蘇そ、干鮑貝くしがい、干海鼠ほしなまこ、丸餅まるもちの味噌汁などが、それぞれに用意され、祝日に忙しい歳暮が筒井の眼の前にあつた。ことに今年の元旦はいつもより賑にぎやかに豊かな酒肴しゅこうが、筒井のためにも心配られた。それは筒井が約した三年めの春が訪ずれ、筒井は神仏ちかひの誓ちかひをとく日だったからだつた。筒井は師走しわすの日をせめてもの心

だよりとして男の便りを待ったが、例に依つてそれは虚^{むな}しい彼女の心だのみに過ぎず、あと二日寝れば正月というのに、何のたよりもなかった。まる三年のあいだ心を砕いて待つていた気苦^き勞も、何の足しにもならなかつた。しかも、貞時一家はこの春に筒井を迎えるために万端の華々しい用意に怠りないのを見ると、筒井は三年も便りが無いとはいえかつて夫を持つていた身分を隠して貞時に従^つくことの心苦しきよりも、そんな明白な嘘はつけるものはなかつた。といつてそれを貞時にすなおに話すには、あまりに貞時の絶望を大きくするものだった。そんな話をきかしても貞時は許してくれるであろうが、筒井は人の心を酷^{むご}たらしく悲しからせることは、いままでに仕えた筒井として出来ないことだった。

筒井はきよう一日、あともう一日というふうに詰つてゆく年の瀬に一片の便りを待つ気持でいたが、生死も定かならぬ人の便りなぞあるはずがなかった。もう凡てが終りだつた。人の情けを偽ることのできない彼女は、元旦の前の日、朝早く裏戸からひそかに貞時の家を出て行つた。それより外に道をえらぶべくもない彼女は、まだみんなが寝んでゐるあいだ、正月の飾りにまもられた恩愛の家の鬩しきいに別れた。

裏戸口にもう白みを見せている梅の木の下で、寒そうに肩をすぼめた筒井は心の中でそつと呟つぶやいて、親切な貞時親子、同輩にわかれた。

「皆さまのお心づくしは筒井、生涯お忘れはいたしませぬ。それ

をそのままお受けするほど筒井の心はくさつてはおりませぬ、なにとぞ、筒井がまいりませぬ以前のようにな静かにおくらし下さいませ。恩愛にそむく罪はあるいは後の日のわたくしのさだめを暗くするかも存じませんが、その折には、よろこんで恩知らずのつみを負う考えにございます。なにとぞ、よき初春をお迎えくださいますよう、皆さまによき倅しあわせがおとずれますよう。」

筒井はかくてこの家を去つた。

そしてかねて彼女が知り合つた二里はなれた宮腹みやはらという村の

おさの家に、彼女は突然あらわれて、仕えの女として忙しい大おおみ

晦日そかをはたらくことになつた。宮腹にも主人の妻はみまかり、

その娘一人は唾で物がいえず、弟は年若であつたが父をたすけて

家事にいそしんでいた。ここにも家族の不倖と冷たさは筒井の心を悲しがらせ、彼女はさびしく笑い、多く働いてそれを紛まぎらせながら、作るものは温かく品高い蒸むしもの物などに皆を喜ばした。家の中は正月半ばになると見ちがえるほど清く美しくなつて行つた。筒井自身はときどき箒ほうきを持つたまま襖ふすまにむか対つて、じつと、或る考えごとにとらわれ、はつとして仕事にかかることがたびたびだつた。水郷すいこうの貞時の家、そしてきらびやかな正月うたげの宴も、筒井が去つては催もよおしもの物の数々が控えられたことであろう、しんせつな父君、額ひたいの若い貞時に永い三年を待たせたことなど、自分は何とていう大きなうそをついていたことであろう、筒井は終日、鬱うつうつ々々としてそれらの愉たのしかつた水郷たのの家のことが、心におおいかかつ

て来てならなかった。

哀れな唾の娘は筒井を慕い、筒井は彼女をできるだけ明るくみちびいて行つた。唾の娘の言葉は筒井にははじめのほどは分らなかつたが、しだいにその表情で解わかるようになった。彼女はただ終日、あああ……というだけだつた。その言葉をよみ分けるために筒井は小鳥の餌えをすつてあたえてから、この唾の娘の頬になみだのあとがのこつた。彼女のほしいものも分り、弟を呼ぶときの調子が解れば弟を呼ぶのであつた。弟は美しい水々しい紅こうきよう頬おの少年だつた。彼は筒井を好いて、筒井のあとばかりを趁おうて慕つた。父という人は筒井を娘のように愛し、おなじ物をあたえ、おなじ食いべものでたわぬり時々ふしぎそうに筒井にたずねた。

「あなたのような人がわれらの家ではたらいで下さるといふことは、まるでゆめを見ているようなものじゃ、あなたは何処どこから見えられたのか。」

「少し事情がありますので御厄介ごやっかいになつたのでございます。おたずね下さらなければ嬉うれしゆうございます。」

筒井は淑しとやかにこれ以上たずねてくれるなどという、柔らかい印象をあたえた。父という人は自らの無ぶ躃しつけを詫わびるように、やさしくいった。

「お訊ききしてわるければ申しますまい、どうか我が家に永くとどまって不倅な姉弟をすくつてやつて下さい、まるであなたは誰か貴い人からつかわされたような方じゃ、あなたのお顔をはじめて

見たときからこの人を永い間待っていたのだ、そしてやっと姉弟を救ってくれる人にめぐり会ったのだと思つたほどでござる。」

筒井は黙つて悲しく父として老いた人が額ぬかずいて語るようなその言葉を聞いていた。永い間彼女は父を思うひまがなかつたが、いま急に彼女はやさしかつた父の顔を眼の前に見るような気がした。御年もおなじくらいではなかつたらうか。

「わたくしは父母とも失いまして身寄りないものでございますから、永くおつかい下さいませ。」

「それは悲しいお話、われら父ともなつておつきあい申したい。」

「ありがとうございます。」

「おいくつになられる。」

「二十三にございます。」

「御婚儀は？」

「はい。」

筒井はうつむいてそれには明らさまな返事ができず、黙つたままでいるより外はなかつた。

「いや、これは失礼なおたずねを致した。気かけられるな。」

「いいえ、ただ悲しいことを避けながらいつもそれに趁おわれている女にございます。」

「いや、かならずお身のような方には、いまに倅しあわせが、おとずれるでござろう。」

衣を縫うていれば傍かたえに来て、姉弟が坐り、立つて庭に行けば

弟は庭の木々の名をも語り、秋に実るものがあればその美しい果実の色までを話した。そしてそういう秋までには梅、一位、杏いちいあんず、桃が間もない春には、いかに美しく暖かに咲き出るかということ少年は解いた。彼自身も好きらしい木々へのこまかい観察がふくまれている、こういう少年こそ和歌のみちをとけば、和歌をものするようになるであろうと筒井は姉弟にひまあれば和歌のみちをといて聞かせた。果して少年は和歌をつくることを覚え、才もおのずから豊かななさ冴えを見せていた。物の見方のこまかいことが筒井にはたのもしい将来を見せていた。

間もなくめぐり来た春は宮腹の家や庭をあかるくし、花はひと

きに勢いを得て開いたが、筒井にあるはずの便りは依然なかった。筒井は男を怨むうらとか薄情者であるとかいふ觀念を持たず、ただ健やかであれと思うほかは淡い気持であつた。こうも心からうすれてゆくものかと思うほど、遠い人だつた。きゆうにその顔を念じて浮べようとするほど、もう顔の感じがまとまって思い出せなかつた。筒井は、こういう自分の心持を男に引きくらべ、男の頭にも自分の顔かたちがこんなふうに薄れて行つているのであらうと、やはり水のような気持でしか考えられなかつた。

或る悩ましく花の蒸むれるような夕方、姉弟が来て筒井に告げた。それはこの一と週まわりのあいだ、毎日のように邸やしきをうかがう男がいるとのことだつた。筒井はそれを一度も眼にしたことはなかつた。

が、その言葉にはあらたまつた驚きで、とうとう彼あの方が見えたのだ、あの方はあの日から自分を尋ね歩いてとうとう此ここ処までお見えになったのだ、あの方でなければできない尋ね方なのだ、あの方が見えたのだ、わたくしを尋ね、かつて捨てられたわたくしを拾いに見えたのだ。だが、わたくしはお逢いしていいのだろうか、お逢いするほどわたくしは厚あつかま顔かましい女であろうか。わたくしはもうお逢いしたい、お逢いすることによつて凡すべてを委ゆだね凡てを忘れたいのだ。

「きょうもお見えになつておられます。」

弟は狩かり衣ぎぬをつけた若い人だといった。もしやと思つたが気色けしきにはあらわさなかつた。

「何かお訊ききになりませんか。」

「物問いたげだったから引き返してしまったの。」

筒井はもう猶予できずに姉弟に家にはいるようにいい、とり急いで塗籠くらの階上かゐにのぼって行つた。その重い埃ほこりの深い扉を開けると、門前かど一帯いちたいが見廻みはるかされた。門の扉かどのうしろに立つた狩衣えに烏帽ぼし姿すがたは、違たがわぬ貞時さだときだった。

「あの方に違ちがひなかつた。もう誰たれにも遠慮えんりょなくお逢あいしよう、進すすんでお逢あいしなければならぬ。わたくしを搜さがり出でされた方かただ。隠かくれて外そとにも出でなかつたわたくしを、神仏かみぶつのちからさえ及およばぬこの家いへから尋たずね出でされたのだ。貞時さだときさま、こちらにお向むかひあそばすよ
う。」

筒井は扉にしつかり掴まり少時うごかなかつた。貞時はそれを知らず、筒井は急いで塗籠くらから下りて行つた。そしてその時筒井は静かにしていられぬほど、誰かが吩咐いっつけけるように、逢えよ、逢うのはお前の礼儀でもあり、そしてかつて無断でその家を出た詫わびでもあるのだ。逢えよ、逢えよ、逢いたがつているのは貞時と同じ気持ではないかと、ふしぎなちからを抑えることができなかつた。

筒井はしずかに片扉をひらいて、貞時の前に深く頭を垂れた。

「ああ、筒井殿、やはり此処ここにいられたのか。」

「はい、あれからずっと御厄介ごやっかいになつています。」

「でも、よく逢つてくだされた。」

「ただ恐れ入るばかりでございます。前からお通いのこともやつときよう承り御無礼ばかりいたしました。あれほどたいせつにしていたのに恩愛を知らぬ女にございます。」

「それには我ら永い間考え侘びていたところ、見かけるところ以前よりも美しくなられた。」

「こちらでも、よくしていただき喜んでおります。」

「よい人の住む家に適しているところのようだね。」

貞時は風致ふうちよろしき庭をひとまわり眺めやった。凡てが主人の好みが出ていて、その好みは築庭ちくていの奥おうをきわめているようであった。だが、表で話をするにはできず、彼女は公おおやけに主人に話をするあいだ庭の片すみの暇を乞こうたのであった。

「どうぞお奥までおはいり下さいませ。」

筒井はわるびれもしなければ前に見たとおりの親しい言葉つきであつた。意外のあつかいに駭おどろいた貞時はかえつて躊躇ためらい、顔をそめながらいった。

「我ら他人の庭にはいつてはどうかと思うが。」

「いえ、お許しを得てまいつたのでございます。」

筒井は息もつかずに詫わびた。「その折、あまりのおなさけ深く身に余りまして無断で立ち去りましておわびの致しようもございませぬ。」と筒井は面おもてをぬらして沁しみ々しみいった。これらの言葉はいつかはいわねばならぬときがあると考えていたが、その日はとうとう遣やつて来たのであつた。

貞時はほかには何もいわず、ただ、ひとつの言葉だけを^{つよ}勁く、迷うことなく答えるようにと聞いた。

「我が家におかえり下さらぬか。我が家はそなたの家も同様なのだ。もう情実^{なさけ}は負わなくともいい、^{いさぎよ}潔くお越しあれ。」

「ありがとうございます。」

「すぐに支度してまいられい、父上のお喜びはいかばかりであろう。」

「何とお詫び申し上げていいか、筒井、恐ろしゅうございます。」

貞時は^せ急ぎこんでこの家の主人によく事情を話して、すぐに只^た今^{だいま}から同伴するよう^{だいま}にいった。然らずばなかなかこの家にもそ

なたを^{ちようほう}調^{ちようほう}宝^{ちようほう}がつて離すまいといった。

「わたくしは只今からでも参りたいのでございますが、今まで御厄介になつていて諸々のしごとの後片付をしないで出ましては氣持が悪うございます。」

筒井はこの家の主人にもつれあい亡くなつてゐること、娘はあわれな唾のこと、弟と三人暮しのこと、そして筒井が家事一切を承つてそれを整理していること、一家から厚くもてなされてゐることを話して、筒井は十日間の猶予を乞うた。

「それまでに主人にあなたさまのこともお話する考えでございます。そうでなかつたらお暇はなかなか戴かれなかも存じませぬ。」

「きつと十日の後に我ら迎えに上り申すぞ、よもや、こんどは隠

れなぞなさらぬであろうな。」

「かならず参ります。それについてお話して置きたいことがございます。これの御承引ごしょういんがなければ筒井はまいれないかも知れませぬ。」

筒井の顔はあらたまつた悲しいゆがみを見せたほど、重い心苦しい問題であるらしかつた。その問題をとかねばならぬ決心はかえつて筒井を異様な青みのある美しさをたたえさせたくらいだつた。

「では、それを話されい。」

貞時もなにやらとうに決心しているふうだつた。

「わたくしは夫を持ったことのある女にございます。お隠しして

申しわけがございませんが。」

「それはなんとなく存じていた。そして只ただいま今はどうなのか。」

貞時はすこしも驚かなかつた。むしろそれを聞いた方が心がやすまるふうであつた。筒井は夫が消息を絶つてから永い間便りのないことを話し、その便りだけをめあてに生きていたのだといひ、貞時の家を出たのもそのためだつた。

「それで何年くらい便りが絶えていられるのか。」

「三年と四月にございます。」

「三年と四月。」

貞時の顔にはなにか怒りのようなものが鋭くあらわれて消えた。三年のあいだ消息を絶つては人はもはやあたらしく婚家のうたげ

に列つらなつてもいいことに平安朝のしきたりはなっていた。

「そのあいだただの一度も便りがなかったのか。」

「はい、永い春秋はただわたくしには永い永いものでございました。しかしわたくしはそれを待ちぬいたのでございます。」

筒井は三年が四年になるか四年が五年になっているように遙かな昔におもえた。そしてその頃と何か世界が變つていて筒井自身も變つているように思われた。

「そなたはその御仁ごじんが生きていられるとお思いか。」

「生きていられるように思われます。生きていられるから消息がないのだと考えられます。」

「訪ねて見えると思わるるか。」

貞時のこの尋ね方には、行きづまりがあり、筒井にそれをひらいてもらいたい気持がかくされていた。

「きつと一度だけは何時の日かに見えるような気がいたします。」

「その時は何と仰せられるか。」

「その折はその折にございます。お逢いできなければそのまま彼の方をおかえし申します。」

「それを聞いて我ら安堵のおもいがした。それにしてもそなたは永い間怱えていられた。その永い間怱えていられたことだけでも、その人はそなたの倅せを願われるであろう、貞時、そなたのような女の人をはじめて知り申した。」

その時、宮腹の主人は遠慮深げではあつたが、二人の前にあら

われ、筒井は極めて落着いたこなしで貞時を紹介し、そしてあらためていった。

「迎えにまいられたのでございます。いままで何ごとも申上げずお許しくださいませよう。」

「なるほど。」

宮腹の主人は貞時を見て、はじめて筒井が秘めていた事情を諒解したのであった。貞時の風貌は宮腹の主人の反感を呼ぶような種類のものではなく、きわめて善良な好印象をあたえた。

「お庭先にて無礼の段、おゆるしあるよう。」

「せめて簀すの子まで近寄られい、お父上とは御昵懇ごじつこんなものでござる。」

「それははじめて承ります。」

貞時は自分の父を知る主人を見直して、あたたかさを感じた。

「近年おあい申さぬが、お父上も、わしもみなつれあいを亡くし、かなしいともがらでござる。」

筒井もこと偶然ではあつたが、父同士の知り合いには、くすしき縁えにしを感じざるをえなかつた。彼らは簀の子にあつまり、梅花の匂いをこもらせた白湯さゆを味あじわつた。貞時はなんとなくいった。

「いずれ申し上げる折もござろうが、実は筒井どのとは父も許してくだされた仲であつたが、筒井どのの謙遜けんそんから身をひかれたわけにて、なにとぞ、おいとまたまわるよう願わしく存じます。」

「さような訳なら何でおとどめ申そう、いや、筒井どのが見えら

れてから我が一家は蘇生そせいの思いが致しておりました。」

筒井は頭を垂れ、どこに行つても大切にされる自分にどこがそれほどの人格ひとがらがあるのか分らなかつた。そして自分が去ればあとに残つた人の心をさびしくする、……そういうことにも徳のない自分を感じた。徳のある自分になろうとすれば、生活を投げ出さなければならなかつた。

「すぐに筒井どのは行かれるか。」

「いいえ、愉たのしき十日間ほど御娘子様、弟様にたてまつり、家中をととのえ、お許しの出る日を待ちとうございます。」

「ああ、よく申された、愉たのしき十日あまりとはよく申された。」

宮腹の主人は筒井の手をとらんばかりに、その言葉を喜んで受

けとり、いますぐ行かれてはこまるともいった。

「貞時さまにまいつても時々はお家のこともおてつだい申し上げたく思います、貞時さま、この儀いまからおねがいたしておきたく存じます。」

「それでこそまことの女の道、貞時よろこんで承認します。」

そのとき宮腹の主人は愉しく笑いをふくんで、自分の愛児にあたえる言葉のように入った。

「お二人の宴うたげにはわしもお祝いにあがってもいいかの。」

「枉まげてお招きを受うけとりくださるように只ただいま今からおねがいたします。」

「ありがとう、われらの娘もともに宴につらなるでござろう。」

間もなく十日を約して貞時はいそいそとして門前に出て行き、

筒井と宮腹親子が見送るのであった。

「きようはよい吉日であった。」

あとで宮腹の主人はいった。

「よくその日まで気をつけていてくださるよう。」

主人はあまり仕事に熱心になりつかれてはならぬと言ひ添え、

筒井は頭をさげて善い人ばかりいる世界を感じた。どこに行つても、筒井は悪い人を見るのがなかつた。四年近くも便りのない人にも、筒井はそれを責めるには余りにも心は平明であり、しあわせであつた。その夜、彼女は黄金のみ仏を抱いてそれにのみ心をささげ、おん慈^{いつく}しみを乞^こうのであつた。み仏は筒井の肌^{はだ}にあた

ためられ、殆ど、冷たくなっている日としてはなかつた。

「み仏よ、あなたさまをおまもりする日はもはや生涯をこめてのことでございます。あなたさまより外には、もはやお待ちいたしません。みやこに去られた方も、あなたさまのなかに秘められてあるという、愚鈍なわたくしの考えをお憐れみくださいませ。あなたさまより外には筒井のまもるべき方もございませぬ、そしてあたらしい彼の方も加えて永くおまもりくださいませ。なにとぞ、人間のさだめない宿命の汚れをおいとい下さいませぬよう。」

夜はあたたかいほど外は晴れているらしく、水辺を去るみず鳥のこえが絶え間なく北方につづいて起っていた。それは春が来る前のしらせのようなものであった。筒井はふと眼をすえてもう便

りの絶えた男に、何かいわなければならぬものをも感じた。

「もうお便りがなくなつてから四年にもなります。そして筒井はお便りをいただこうにも、いただきようがなくなりかけています。筒井もまだ生きねばならず、どうぞ筒井を生かしてくださいませ、四年というものあなたさまをお待ちするために生きましたけれど、それは反古ほご同様ないのちのつなぎでございました。あとの何年かはわたくし自身のために生きてゆかなければなりません、そしてわたくしによつて更に生きてゆこうとする老いた人と、その御子息さまとに望のぞみを絶えさせることはわたくしには出来かねます、ちからを藉かしてでもろともに生きてゆかねばならないのでございます。これもお許しく下さいませ、そして何処どこにいらせられてももはや

わたくしのことはお忘れあるよう、お尋ねくださらないように念じ上げようぞんじます。わたくしはあなたさまを忘れるために努め、あなたさまなきように心できめようとするほど、まだあなたさまに悩まされていて悲しゆうございます。ともあれ、いまは何よりも永いお別れをいたしとうぞんじます、それだけがわたくしのこらえ^{こら}忪えて来たあとに、やっと分つたことのそのひとつでございませう。

「わたくしどもがはじめ別れて勤^{つと}めおうたのが、みんな間違うて行つたはじまりのように思われます。人はもろともに暮していたはずのものが別れてはたらき、別れて行き逢^あうということがもう悲しみのはじめに思われます。大人のような考えをおたがい

ち合っていたようなのも、ここまで来て見ればあれはみな子供の
そら考えとしか思われません、子供の考えごとがわたくしどもを
たいへんに不幸にさせ、もし仮に他の人であつたら現^{いま}今のわたく
しのような善い人たちにかこまれることもなく、かなしい憂^{うきめ}目を
見たかも分りません。ともあれ、わたくしは仕合せでございます。
仕合せのままお別れすることはきよ^{きよ}うの何よりの喜びにございま
す。わたくしにさえ仕合せがあるくらいでございすから、あな
たさまにもその仕合せの翼が間もなくあなたをかき抱いてくれる
ことは疑いませぬ。かならずあなたさまも愁^{うれ}いの眉をおひらきに
なるときがあると思ひます。」

「さよならきのうのひとよ、かつてわたくしの中にあつた大きい

信仰のような人よ、わたくしは今宵こそしめやかにおわかれの言葉をさしあげる時を得ました。あなたさまのみ仏は、筒井は永くおもりをいたしたい考えにございます。何よりも世界でもっとも大切なものにおまもりいたします。では、つつがなくおすごし下さいませ、わたくしごときを決しておもい出してくださいさらないように終りにおねがいたします。あなたさまは大変によい方であらせられました、いまもおいい方であり善いお心を持っていらっしゃる方であることを疑うものではございません、どうぞ、またなき幸いのうちにお暮しく下さいませ。」

筒井はこういう^{いのり}禱のような言葉を頭にうかべているあいだに、男はずっと遠のいてゆき^{ほとん}殆どその顔も見えないところにいるよう

に感じ出した。そしてやっと筒井はやすらかさを胸におぼえた。

十日あまりの日はまたたく間に過ぎた。そしていま一日、もう一日と停とめられているあいだに、筒井は気が気でないようなあせった気持ちになった。哀れな唾の娘は終日彼女のそばを離れず、弟も同様はなれなかつた。唾の娘はさまざまな海の貝、衣裳の断ちぎれ、造花を筒井におくり、宮腹の主人は紅梅色の襲かさねを生きがたみとして贈り、亡妻のこまごまとした女物を筒井にあたえた。別れを惜しむための家だけの宴がもよおされ、春の菜のあつものさびしい一夜を送った。

そのあいだに貞時は二度尋ねて来たが、この不倖な家からすぐ

にも筒井を引き出すことが出来なかつた。彼自身の幸福のために、あまりにも人を悲しがらせたくはなく、むしろ、快くあと二日くらいはとどまることを彼自身から申し出たほどであつた。二度目のときはすでに十日を過ぎていて、貞時自身も一刻も早く筒井のそばにいたかつた。彼は主人が座を立つたあとで、せき込んだ悲しい掠かすれた声音こえになつていった。

「我ら何事も手につかぬほど待ち申しているほどに、一日もはやく来て下され。」

「わたくしもう参りたくはぞんじていますけれど、いま一日お待ちくださいませ。」

貞時が去つた後二日、やっと筒井は宮腹の家に別れを告げた。

この家にとどまっていたことも偶然ではあったが、この偶然ははなはだ筒井にとって明るい春秋がおくられ、そして此^{ここ}処にいたために貞時に逢えたようなものであった。

宮腹親子は門前に出て迎えの女車に乗った筒井に、こういう善い人たちが生きている世の安らかさを再び感じたほど、ふしぎに感動したのであった。

「かならず吉日にはたずねて見えられい、我らその日をお待ちする。」

主人がそういえば唾の娘は、ただ、声をあげて別れを惜しんだ。「ではお別れいたします。」

筒井は人情というものの重たさを背負いきれない気持であった。

女はみなそんなものかも知れないが、筒井の生涯の半ばもその続きだった。彼女は愛せらるるために身も心も重く、そしてそれに離れるために苦しまねばならなかった。それにしても筒井の知った人びとは、どの人もみな不幸と悲哀を言い合わしたように持っていた。或る意味でどの人にも多少の不幸がくい込んで離れないのかも知れない、筒井のくるしみなどは物の数であろうかと思つたが、彼女はその三年四ヶ月の永い歲月は一生の半ばをついやしたように永いものに思われた。

暖かい春の昼頃であつた。筒井がもどつて来てから急に明るくなつた水辺の家では、いよいよ筒井と貞時の婚宴の日が迫ると、

家の中、庭の内そとがあらためられ、塵ちり一つのこさずに掃き清められた。貞時は筒井の長い髪を見ていった。

「とうとう今宵こよいという日が来たね。永い間ではあつたがきようになつて見るとそれほど永いとは思わない。」

筒井はだまつて領うなずいて見せた。この四年のあいだに女としてまもるものを守つた彼女は、なにか苦行を終えた後のような身の軽さが感じられた。いまになつて見ると何の為に永い間はたらいてばかりいたか、徒事あだごとにすぎないことに思われた。人は徒らいたずに無駄な歳月を経てから、或る頂いたきたどに辿りつくものらしく、そうなると役えきなき歳月もまた頂に達する日のために、用意された苦行としか思われなかつた。

「永いゆめでございました。なにも彼も、あまりに遠い日のことに思われてなりません。」

「そなたは誰でもできないことをなされた。そのよい償いは我らがつかまつるようになるであろう、まるできょうの日のためにそなたは苦勞されたようなものだ。」

「それは勿体もったいのうございます。わたくしはやはりあれだけのことをしていなければならぬように、約束されていたのでございませう。それゆえにきょうの身心の軽さは生れかわったように思われます。」

「間もなく日がくると変った夜がおとずれて来る……」

筒井は赧あかくなつてうつ向いた。梅の梢こずえにきょうの夕陽はひとし

きり華やいで間もなく、日ぐれがいきなりやって来て暗くなるの
 であろう、西、東の対たいにはや灯とも火しびがともれはじめた。

「では今宵にさいわいあれ。」

貞時が去り、筒井はくらみかけた庭先を去ることをせず、まだ
 明るみを持つ雲の色を見つめていた。変ることに迅はやく、形を消す
 に早い夕雲は間もなく鼠ねずみ色いろのひと色にとざされてしまった。
 だが、まだ筒井は気のせいか庭戸から離れようとしなかった。そ
 の時、築地つじの外に落葉をふみ分ける音らしいものがしたが、筒井
 は気にしなかった。しかし音はなおつづいてそれが人の蹠あしおと音とで
 あることを知った。こういう日暮に誰たれ人びとの蹠音とであろうと、筒
 井ははじめて注意を向けた。蹠音は裏戸のあたりで停とまつたらしく、

何となくその方に眼をとどめた。その折、低い声音を忍んで二声ばかり聞え、その声は実に遠い記憶にこた応えのある声だった。

「筒井、筒井、」

筒井は愕然がくぜんとして髪の毛を釣られるような緊迫した一瞬の中にあつた。名前はふたたび呼ばれた。その時、ふたたびおどろ駭きに憑つかれた筒井はその声のぬしが、四年前に別れた男であることをもはやうたがうことが出来なかつた。とうとう戻つて見えられた。しかも今宵という日に、漂然ひょうぜんともどつて見えられた。しかも生きていられ健やかであつた。これは一体どうしたことであろう——筒井は、からだを小さくできるだけ小さくし、呼吸いきを呑みこのんでなおうかがうように裏戸の方を見すえていた。

「筒井、ただいま戻つて来た、お会い申したい。」

男の声はむかしとは渝かわりのないものであつたが、筒井はすぐに答えることの軽卒さを身に感じた。それにしても今宵とは誰のいたずらであろう。筒井は悲しい怒りさえかんじ、眼をうら戸から離さなかつた。そして彼女は 畳たとうがみ紙しにさらさらと書きくだして、それを自分で持つて行くべきか、仕えの女に持たせようかと考えているあいだにも、そとの声はつづいた。

「この戸を開けたまえ。」

ついに筒井は裏戸の方に行こうとしたが、きゆうに会うべきでないことを知つた。彼女は仕えの女を呼んだ。仕えの女に彼女は裏戸にいる男を教えた。

「これをあの方にたてまつるよう、ほかのことは承つてはなりませぬ。ただこれだけを差し上げるように。」

筒井は畳紙にしるした一首の和歌を仕えの女に手渡した。

「はい。」

仕えの女は裏戸に向いて去った。

あらたまの年の三年を待ちわびて

ただ今宵こそにひまくらすれ

仕えの女はしばらく裏戸から去らずに、何かを待っているふうだった。筒井は固い唾つばを呑み身じろぎもせず立っていた。仕え

の女はもどつて来ていった。

「これをと仰せおおられました。」

筒井は早書きにした紙片にしるされた文字をなつかしく読みく
だした。落着いた心をそのまま述べたような和歌だった。そして
それは男が謙遜けんそんにもできるだけ広い愛を持ち、その愛情を示す
ことにより、一層、筒井を愛したような迫つたものさえうかがわ
れた。

あづさ弓ま弓つき弓としを経て

わがせしがごとうるはしみせよ

「わがせしがごとうるはしみせよ」こういうお氣持でいられたのか、自分にしたように貞時さまに尽すようにとのお言葉であつた。これはありがたい言葉であつた。

「あづさ弓ま弓つき弓……」こうも弓にも品々あるほど、我も苦
勞したといわれている、便りのなかつたのは苦勞が多く、身を起
すひまさえなかつたのではなからうか、それゆえにこそ逢いに津
の国に下らなかつたにちがいない、それは筒井はまるで知らなか
つたことだ。やはり彼^{あのかた}方はよい人であつた。いまになつてもよ
い心を失^{なく}さずにいられるではないか。筒井は頬をぬらしながらな
お一首をもものし、何度もよみ返して、さて、さめざめといった。

「これをお渡しあるよう、筒井はいいあらわせないお礼を申して

いるとおつたいください。」

あづさ弓ひけどひかねど昔より

こころは君によりにしものを

そしてなお、しばらくじつとしていた間に仕えの女はもどり、
よろしく仕合せにつくよう仰おおせられ、こちら向きになり拝して去
られましたといった。筒井はたえかねて自ら裏戸に走り出て見た
が、夕はもはや夜を継ついで道のべ裏戸近くに人かげはなく、暖か
い夜の夕ゆうもや靄もやさえそぞろに下りていた。

「おすこやかにおわしませ。」

筒井は誰に行うとなく頭をさげて拝した。なぜにもつと早くにもどつて来てくださらなかつたのかと、筒井はものの終りへささげる言葉を心につぶやいた。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 上」作品社

1982（昭和57）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「津《つ》の国人《くにびと》」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年3月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

津の国人

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>